口からは5㎞以上離れているし、北上川は幅が400mもあるので、まさか大津波に襲われるとは、誰も想像すらしていなかった。

「何も情報がないまま、初日の夜を明かしました。二日目は朝からあちこちの避難所を歩いて回りました。でも、どこに行っても生徒の姿は見えない。夕方、ようやく5年生の女子生徒にひとり会えただけでした。母親が車で迎えに行って、いち早く学校を離れて助かったのです。その子も家は流されたんですが、とにかく生きていてくれてよかった、と涙が出ました」

翌日からも少しずつ、助かった生徒の情報が集まってきた。しかし――、それはあまりに少なかった。

数日後、初めて小学校を見に行った。

「これは夢なんじゃないのか……。いや、夢であってほしい」

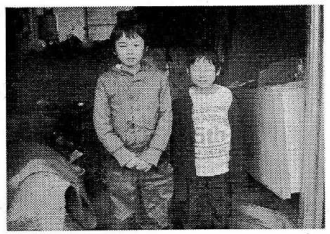
昔、戦争映画で見たトーチカを思い出した。愛する学校が骨組みだけになっている。周囲にあった家並みも商店も、道路すらもなくなっていた。まさに戦場で爆撃を受けたような惨状だった。父母たちが校庭のあった場所の泥をかき出し、わが子の遺体を捜す姿を目の当たりにした。

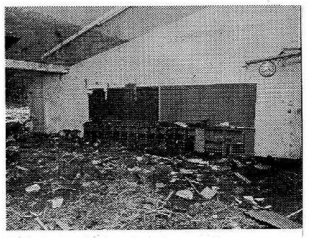
その瞬間、柏葉校長の胸に言いようのない感情が込み上げてきた。

「自分は何でここにいるんだろう、と思ったんです。あの日、なぜ自分は学校にいなかったのか。なぜ生徒たちと一緒にいられなかったのか」

あの日、一緒にいたかった――それは、死にたかったと言っているのと同じことだ。

柏葉校長が自分を責める理由はない。だが、大切な生徒たちの多くを失った事実を前に、心が折れた。2年前、校長として初めて赴任した学校だった。子どもたちを守れなかった自分が情けなかった。


助かった大槻兄弟


校舎2階の教室

バイバイも言えなかった

その後、追い打ちをかけるように、安置所で何人かの生徒の遺体と対面した。全校108名の小さな学校だ。全員、顔と名前を覚えている。ああ、中庭でいつもサッカーをしていたあの子だ。この子は音楽室で笛の練習をしていた……。

暗闇にわずかな光が差したと感じたのは、教務主任の先生（50歳）が生きていたと知ったときだった。教師の生存情報は初めてだった。しかも、彼は何人かの生徒の命を救ったという。

「自分が助かるのも大変な状況のなかで、生徒の手を引いて学校の裏にある山を駆け上がったそうです。感謝の言葉がなかった。同時に、つらいのは私より彼のほうだろうと思った。目の前で生徒たちが津波に呑まれるのを、彼は見ているはずです」

電波状況が回復し、ようやく教務主任と電話で話せたのは災害から5日後、16日のこと。電話の声を聞くだけでも、精神的にかなり参っているのがわかった。あの日に校庭で何があったのか、詳しく尋ねることはとてもできなかった。

教務主任と話したことをキッカケに、校長は少し変わった。現場にいなかった自分を責めるのではなく、生きている生徒のためにできることは何か、と考えるようになる。

「家も学校もメチャクチャになり、たくさんの友達を亡くした。不安がないはずがない。そんな子どもたちの前で、自分が落ち込んだ顔をしてどうするんだ、と目が覚めたんです」

生存が確認された生徒には必ず会いに行くことにした。24日には、幸運にも兄弟二人とも助かった大槻零士くん（4年生）と一斗くん（3年生）を訪ねた。親族のところにいるとは聞いていたが、それまで場所がわからなかったのだ。

涙ぐみ、二人を抱きしめる柏葉校長。感極まって言葉が出ない。二人は子どもらしく、戸惑いながらも笑顔を見せた。

二人の母親、多美子さん（35歳）が言う。

「学校の方と一切連絡が取れていなかったので、私たちも不安だったんです。子どもには、なるべく津波の話は聞かせないようにしてきました。特に友達の話は……。零士の親友も亡くなってしまったので」

もう君たちは戻ってこないのか

現地レポート

零士くんは弟を後ろにかばいながら、あの日のことを少しだけ話してくれた。

「地震が来たときは終わりの会の途中で、『2分の1成人式』で歌う、いきものがかりの『ありがとう』を練習していました。校庭に出て並んでるときも、余震がきて女子が『キャーッ』って叫んでました。

おじいちゃんが車で迎えにきてくれて、僕と弟は先に帰りました。自転車もクツもヘルメットもランドセルもぜんぶ学校に置いてきちゃった。友達にバイバイも言えなかった……」

親友の竜生くんとは、週末にサッカーをして遊ぶ約束をしていた。

「津波、だいっきらい」

零士くんはそう言って、弟と駆けていった。親族の家にあったものだろう、指先に穴が空いて寒そうなスニーカーを履いていた。

助かった子どもたちが4月からの新学期をどう迎えるのか、いまはまったく決まっていない。柏葉校長も頭を悩ませている。

近くの路上にはランドセルが並べられていた

「あそこに何かを建て直すことは、やっぱりありえないでしょうね。当面は周辺の小中学校の空き教室を借りることになるのか……。でも、六つも教室が空いている学校はないし、そうすると、学年ごとに違う学校に行くことになるかもしれない。そもそも、家を流された子がこの地に留まるかどうかもわかりません。無力で申し訳ないが、どこから手をつけてよいか……」

ウチの子の分まで生きてね

だが、大人の不安をよそに、零士くんと一斗くんは明るかった。表情が翳ったのは友達の話をしたときだけで、寄宿している親族の家から坂を下りたところにある自宅に記者を案内してくれた。

「全部水浸しになっちゃいました！　お風呂の瓦礫が特にすごいんです」

「宝物を持って出たんですけど、ゲームの充電器だけ忘れちゃって……。どうせ電気がないですけど」

慣れない敬語がどこかユーモラスで、思わずこちらの頬が緩んだ。

本誌は避難所で暮らす6年生、浮津天音ちゃんとも会うことができた。父親の勝明さんが言う。

「ウチは妻が車で迎えに行って助かりました。でも学校を出てからずっと、友達のことを心配して元気がなかったんです。そして、避難所で学校に関することを耳にしてしまい、一晩中泣いていました。でもあるとき、亡くなった親友のお母さんが励ましてくれて、少し元気になったんです」

親友のお母さんは何と言ってくれたのか。天音ちゃんはこう答えた。

「『娘のかわりと言っちゃなんだけど、ウチの子の分まで頑張ってね。頑張りすぎないように頑張ってね。楽に生きて』って言ってくれたんです。頑張りすぎないようにというのは、あまり深くしょいこむな、という意味だと思います。お母さんだって辛いだろうに、私の心配までしてくれてありがたかったです。

それからは少し、前向きになれました。自分のやれることはないかなと思い、避難所にいる小さな子どもたちに本の読み聞かせを始めたんです」

避難所で「本読みお母さん」と呼ばれるボランティア活動だ。12歳の少女は、けなげに今日を、そして明日を生きようとしている。

本当なら災害から1週間後の3月18日、天音ちゃんたち6年生は卒業式を迎えるはずだった。勝明さんが続ける。

「6年生21人のうち、助かったのは5人だけだそうです。娘は何も言わないけど、あんなことがあった上に卒業式もないのは、親としてはやっぱり不憫で。亡くなった子どもさんのことを思うと、難しいのはわかるのですが……」

柏葉校長も思いは同じだった。校舎は二度と元通りにならなくても、たとえた5人だとしても、6年生はちゃんと卒業式をして送り出してやりたい。

「いますぐじゃなくてもいい。できることなら、助かった5名には21名を代表して卒業証書を受け取ってほしい。6年間よく頑張ったねって、子どもたちに伝えてあげたい。そのためにできることは何か。それを考えるのが、いまの私の仕事だと思っています」